
ひとひねり

午雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとひねり

【Nコード】

N2376M

【作者名】

午雲

【あらすじ】

この小説は、ジャスト200文字の連作小説・集です。特にテーマはありません。

第一話 宝くじ

忘月忘日 宝くじ消費税が創設される。

忘月忘日 毎月一日、七時のニュースにて宝くじの内容を発表するとの布告。

忘月忘日 第一回は昭和四十四年生まれの国民。

当選金額は一律百万円。

私は当選し、銀行で受け取り、その場で預金する。

忘月忘日 第二回は該当者なし。

忘月忘日 第三回は該当者なし。

忘月忘日 以後、該当者なしが延々とつづく。

忘月忘日 キャリーオーバーの残高が一兆円を突破。

忘月忘日 政権が交代し、宝くじだけが廃止される。

第二話 道しるべ

道標がある。

右、博労峠。

左、早乙女峠。

英二郎は、どちらに行くべきか少し迷った。

約束があるので、運を天に任せて、右へ道を選った。

なるほど、きつい峠だ。

途中、先を往く年寄りに追いついた。

「兄さん、よかったね」

「何が」

「わしゃ引き返して来たんだ。あの道標まで。」

「早乙女峠からかい」

「おうさ」

年寄りと道連れになって、英二郎は峠を越えた。

「あれ、淵だ」

「なんだ、やっぱり淵か」

年寄りには、その場にへたりこんだ。

第三話 滅亡

たった一人の男にわたしたちは負けた。

神業のような弓の使い手。

しかも、彼の矢には毒が塗ってあったのだ。

「あの男に仕えよ」

最期に王が言った。

「我らが神殿を守るのだ」

男たちは残らず殺され、後にわたしたち女だけが残った。

「望みをいえ」

「はい」

代表して、巫女が進み出る。

「図書館を燃やしてよろしいでしょうか」

「なんと、そんなことで良いのか」

彼は笑った。

図書館に火が放たれ、全て灰となった。

神殿だけが後に遺った。

第四話 問題

一生書生と謂えば聞こえは善いが、院生なんて実際は教授の雑用係だ。

酒を贈るなら相手が違うと叫びたい。

採点するのは俺達なのだから。

今年は受験問題の作成を任された。

苦心するのは何より満点よけの問題を作る事である。

消去法を駆使して機械的に正解を拾う。

そんな裏技があるから手強い。

ならば、こう問いかけてみたらどうだろう。

最も近い意味のものを選べ。

軒並み当たらずといえども遠からず。

正解？

それは、とばす事である。

第五話 マイナス

算数と数学とは明らかに違う。

数学にはプラスとマイナスが出て来るのだ。

足し算ならまだ分かる。

けれど掛け算が分からない。

僕は、もう焦って居た。

早い方が良いと思い、授業が終わるとすぐ教師へ尋ねてみた。

「先生、マイナス×マイナスが何故プラスなんですか」

「そういうきまりなんや」

と教師が答えた。

「え？誰がきめたんですか。」

「きまりはきまりや！それでええやないか！」

癪癪を起こして、教師は向こうへ行ってしまった。

第六話 仔うさぎ

山間の小学校。

飼育小屋のうさぎに仔が生れたので、

僕は野原で草を摘み、

放課後、何度も学校との間を往復した。

金網の隙間から餌をあげるのが楽しかったからだ。

ところがある朝、学校へ行ってみると、

仔うさぎは残らず小屋の内で死んで居た。

どうして？

その日は一日、悲しみに暮れた。

何年か経って、

偶然、こんな文が目に残った。

うさぎは目の前に草を差しだされると食べずには居られないので
す。

瞬間、急にお腹が痛くなった。

第七話 夢

公園で鳩に話しかけた。

「鳩さん、あなたは良いですね。いつでも空へ飛び立てるから。」

鳩が応えた。

「何言ってますねん。飛ぶのんてムチャクチャしんどいんでっせ！腹減ってしゃあないわ。」

池で鴨に話しかけた。

「鴨さん、あなたは良いですね。水の上を楽しそうに泳ぎ回れて。」

鴨が応えた。

「楽しい訳ないやん。こう見えても水の中では水掻きっ放しなんやで！バタバタや。」

イルカになりたい。

これからは、そう想うことにした。

第八話 流行

人間はコレクションが好きである。

往々にして変なモノを集めたがる。

それは子供も同じ。

彼の友達の間では牛乳瓶のキャップを集めることが流行って居た。

あの円い形がお金に似て居たからかも知れない。

珍しいキャップは旅行の際に、もたらされた。

彼の両親は旅行が好きだったので、

彼は何時も休み時間のヒーローだった。

ムリして二本飲み、一枚は必ず誰かにあげたから。

思い出のコレクション帳。

開けたら、中身はカビだらけだった。

第九話 車輪の下

クルマにヒトがひかれた。

何を隠そう、

ひいてしまったのは、この俺である。

バイクが追突され、ライダーが対向車線へ投げ出された。

そうして彼の身体は今、俺のクルマの車輪の下にある。

警官が駆けつけて、俺に告げた。

「致命傷を与えた者が加害者という事になりますので」

「は？」

見ると、対向車線には影も形も無い。

「俺は悪くない」

「じゃ、誰が悪いんだ」

「法律が悪い」

「バカ、法律はヒトじゃないだろ」

俺は思わず天を仰いだ。

第十話 胆だめし

新入部員歓迎、胆だめし大会。

彼は廃屋に身を潜め、じっとその時を待つ。
被り物では甘過ぎる。

彼の顔面は極彩色に染まって居た。
絵具を混ぜて直に塗りたくったのだ。

やがて話し声がある。

女の娘たちが来たらしい。

彼はそつと懐中電灯のスイッチを入れた。

「ガタタ」

「きゃーっ」

物音に驚いて、たちまち女の娘たちの絶叫が響く。

けれども彼は焦って居た。

窓が開かないのだ。

今日一日、

バレないように、

ずっとここに隠れていたのに。

第十一話 物好き

文字を読めない人の心理を知りたい。

そう思い、スラム街へと出掛けてみた。

居る、居る。

たくさん居る。

変な趣味だなと思いつつ、ひそかにほくそ笑んで居た。

「あんた何か言葉つきが違うね」

「この人間とは思えない」

ところが、少し話しだすとみんなそう言う。

弱って居ると、不意に背後から声が掛かった。

「きつと物書きか何かだろ。たまに居るのさ、こんな物好きなヤツが。」

それを聞くやいなや、

一人残らず立ち去ってしまった。

第十二話 仲間

バンドの悩みは、ボーカルばかり目立つコト。

あいつも売れるまでは頭が低かったけど、この頃は威張り通し。

まるで自分一人の手柄みたいな口を利く。

お前の居ない処ろで、俺たちはお前の何十倍も練習してるってのに。

思い余って、俺たちはバックバンドじゃないと叫んでやった。

あいつを追いだし、俺たちはスカッとしてライブへと臨む。

客席を見渡すと、駆けつけたのは親衛隊の面々だけ。

それ以外、ついに一人も入っては来なかった。

第十三話 チャンス

男だらけで過ごす、麻雀の場。

たとえばバレンタインの日であろうと、バの字も言わない。

小差でトップを競って居て、オーラス。

トップは俺なのだが、さっき親が流れたばかり。

もっともアガりにくい、北家であった。

親は第一打、北。

続いて、南家も北。

合わせて、西家も北。

しめた！

俺は、目を輝かす。

配牌のなかに、同じく北があつたからだ。

四風連打！

勇んで切りだすと、

すかさず、一人がこう言った。

「少牌やな」

結局、ラスだった。

第十四話 マシガン

訪れる人も稀れな山岳地帯。

そこに俺たちは居る。

なぜなら国境警備隊だからだ。

ひと一人通るのがやっとな峠道。

下は断崖。

上は絶壁。

その途中にマシンガンを構えて立ちふさがる。

来た！敵兵だ。

先頭の隊員がマシンガンを撃ちまくる。

次々と敵兵が奈落の底へ落ちてゆく。

しかし敵兵は黙々と列をなして来る。

それどころか山の果てまで真つ黒だ。

マシンガンの性能に何ら問題は無い。

損害もゼロだ。

けれど、弾切れは時間の問題だった。

第十五話 口喧嘩

ワタシは人面痘。

彼の手の平の中に棲んで居る。

元はカビよ。

水虫？失礼ね。

今日も歌の練習。

顔しか出せないワタシには、これしか能が無いんだってさ。

ワタシばかり歌わせて、彼は何もしない。

ずるい。

卑怯だ。

いつか殺してやりたい。

え？

俺が死んだら、お前も干からびるぞって？

脅す気？

喉笛に噛みついてやりたい！

え？

男みたいな口の利き方するなって？

何よ！偉そうに。

カビに性別なんてあるわけないでしょ？

勘違いしないでよ。

第十六話 ウィークエンド

真夏の外回りは辛い。

どこかクーラーが利いた所で涼みたくなる。

でも携帯電話があるから、それもできない。

そんな週末の夜。

上司が珍しく誘ってくれた。

「おい、ヘンリー、ヒマか？」

「よく御存知で。」

「よし、これから元気が出る所へ連れてってやる。乗れ。」

「ホントですか。」

行く先は、少し離れたカジノ街。

窓越しに辺りの賑わいを眺めて回る。

「どうだ、ヘンリー。」

「は？」

「元気でたか？」

その時にはもう、街外れだった。

第十七話 うわごと

「わたし、飲まないと歌えないのよね!」

彼女がそう言うので、ビアガーデンでしこたま飲んだ。

「さ、行きましょ!」

立ち上がったのは良いが、彼女は間もなく酔い潰れてしまった。

「ゴメン、うれしくて飲みすぎちゃった。」

(おい、おい!)

あわてて救急車を呼んだけど、彼女はずっとうなされ通しだった。

「苦しい!死ぬ!助けて!」

「安心しろ!俺がついてる。」

「苦しい!死ぬ!助けてOO君!」

それは、誰か他の男の名前だった。

第十八話 無名

教師とは仮りの姿。

ボクの夢は作家になる事です。

え？公務員は副業を禁止されてるって？

それは百も承知、そんなドジではありません。

ボクは今、国語辞典のゴーストライターをして居ます。

種本は広辞苑。

その文章を自分流に書き直せば出来上がり。

ほんの雑用仕事だけれど、自分の文章が活字になるのは嬉しいものです。

それにしても五十音別の辞書というのは使いにくい。

品詞別に分けてあればいいのに、と内心は不満です。

内心はネ。

第十九話 午睡

午睡から醒めてバスルームへ行くと、洗面器の水を猫が舐めて居る。

夏だから猫も喉が渴くのだろう。

シャワーを浴びてダイニングへ行くと、

(!?)

テーブルに在った料理が喰い荒らされて居た。

「お前か？」

思わず猫の方を睨む。

「ニャーン」

そのとき庭の外から鳴き声が届いた。

すかさずウチの猫が走り寄る。

網戸を隔てて見つめ合う二匹の猫。

ーと思つたら、

ひょいと爪を掛け、勝手に引き開けてみせた。

まだ仔猫だと思って居たのに。

第二十話 雲

サークルの夏合宿で、山登り。

電線の無い空を眺めるのは気持ちいい。

不満といえば、彼氏と離れ離れなコト。

携帯の電波が届かないから、連絡も取れない。

この景色を彼にも見せてあげたい。

あ、あのちぎれ雲、なんだか彼の顔にそっくり。

さっそく携帯のレンズを空へかざしてみる。

「・・・雲なんて撮ってどうするの？」

友達にそう言われたけど、理由は内緒。

帰ってから彼氏にみせると、

「どこが俺だよ？」

なぜか全然、似て居なかった。

第二十一話 海辺

夏休み。

いとこのお兄さんに誘われて、みんなで海へ出掛けました。

ぼくは本を読むほうが好きだけど、わがままは言えません。

それに今、書きかけの小説が、ちょうど海のシーンなのです。

「ビーチバレーしよ!」

「甲羅干ししよ!」

めいめいが声を掛けて来るけれど、

ぼくは生返事して誤魔化します。

「ねえ、ひとりだけで何処いくの?」

「聞こえないの?」

そうとも知らず、

ぼくは海辺の景色をひたすら目に焼きつけて居たのです。

第二十二話 駄菓子屋

駄菓子屋の店先には必ず置いてある、ガチャガチャ。

一回二十円、当時はウルトラマンの怪獣消しゴムが流行って居た。

もちろん誰も消しゴムとしては使わない。

それを持って居ることを自慢し合っているのである。

ある日、仲間の一人が親にねだって駄菓子屋さんと掛け合った。

「ガチャガチャの中にあるカプセルを全部売ってくれ！」

というのである。

噂はすぐに広まり、

「いち抜けたっ」

「にい抜けたっ」

次の日からは、ビー玉が流行りだした。

第二十三話 幽霊

次は、初めての授業参観。

もう大人たちが中へ押しかけて来る。

ぼくはお手洗いにいきたくなくて、ひとりそつとそこを抜け出す。

学校の便所は昼間も薄暗くて、

時たま幽霊が出ると言われて居た。

うわっ壁の向こうから足音が。

おしっこだけして、ぼくは外へ跳んで出た。

柱の陰に誰か隠れて居る。

地面に影が伸びて居るからだ。

ぼくらは、しばらく追いかけっこした。

「幽霊かと思った」

「・・・ぼくも」

ふたりとも後でお母さんに叱られた。

第二十四話 キャプテン

最後の夏。

俺は今日もベンチに居た。

「キャプテンなのに試合に出られないなんて、なんかヘンですね？
キャプテン。」

「キャプテンはあだ名だからな」

俺は澄まし顔していう。

こうマネージャーと仲良しなのも補欠ならではの。

「お前はどこでも守れるからな」

監督が微笑む。

「お蔭でみんな安心して全力プレーができる訳だ」

「はい、監督！」

俺は生真面目にうなづく。

でも内心、

（誰か怪我して呉れないかなア）

ずっとそう祈って居た。

第二十五話 逢瀬

わたしは神殿を守る巫女。

くじ引きで当たってしまった。

外へ出るのは十日に一度、川に入って水浴びするだけ。

そんな私にも言い寄って来る男が居る。

幼馴染の人。

ついで返事を書いた事がなかったけど、ついこの前、約束してしまっ
た。

待ち合わせ場所は、あの川瀬。

私を探してみなさい、と言って遣った。

召使いはみんな盲目だけれど、その代わり耳さとい。

「川の神と話してきます」

衣を脱ぎ捨て、私は静かに川の中へと潜って行った。

第二十六話 夕暮れ

夏の日。

「あのお日さんを私だと想って今日一日ずっと眺めて居よ」

「はい、若さま」

「約束したぞ」

「きつと」

小屋をでて、わたしは一人、空を見上げる。

お日さんの行く先をじつと目で追いかける。

暮れなずむ光が頬を火照らす頃、

待ちわびた足音が聞こえて来て、

わたしは思わず振り返る。

「若さま」

「さあ、ついて参れ。今は迎えて取らそつ。」

「はい」

わたしの眼から涙の粒がこぼれ落ちる。

その時にはもう何も見えなくなって居た。

第二十七話 雨

「湖を造つて呉れないか？」

「こんな砂漠にですか？」

「うむ。われわれは水をみると心が安らぐのだ。」

「そんなもんですかな」

金に糸目は付けないと言うので、

海の潮水を汲んで蒸留したのち、

空池^{からいけ}へ流し込んだ。

「おおっ河無き処ろに湖がー」

「パイプラインの河と謂つた処ろです」

日を待たずして雲が湧き立ち、

砂漠に雨が降るようになった。

「これは困る。元に戻して呉れないか？」

「そんなこと言われましても・・・」

第二十八話 口癖

阪急電車で吊革につかまって立つ、ヤツと俺。

「関西の電車って空いてるなア、川崎じゃありえねえよ」

サークルの溜まり場に立ち寄って、しゃべりだすヤツと俺。

「コンパは割り勘に決まってんじゃん、川崎じゃありえねえよ」

後輩の女の娘たちを誘って、遊園地へとやって来たヤツと俺。

「考えとくって言ったらOKってことじゃん」

ヤツが大声で叫ぶ。

「川崎じゃありえねえよ」

門限を言い立てて、

女の娘たちはさっさと帰ってしまった。

第二十九話 横断

学校の行きしな、溜め池で捕まえたトノサマガエル。

理科室で飼って居る雷魚のエサにしようと思って、先を急ぐ。

けれど、すっかり手の内から放してしまった。

「こら、待てっ」

地面を蹴って、

知ってか知らずか、

トノサマガエルは車道の真っ只中へ躍り出る。

（うわっ）

（ぐわっ）

クルマが来るので追うこともできずに立ちすくむ。

それでもトノサマガエルは戻って来ようとはしない。

見て居られ無くなって、

逃げるかのように立ち別れた。

第三十話 矛と盾

見慣れぬ舟が漕ぎ寄せて、陸へ上がる。
敵は三名、鳶口を手挟みて走り出す。

丘の上に立つワシは音頭とり。

鍛えた喉で村の衆へ指し図する。

「やれ物盗りぞ、出合え者共」

方形の盾を押したてて、わらわらと外へ集まる。
誰が誰だか、丘の上からならよく判る。

「やれ追い回せ、押し包め」

「取り囲め、抑え込め」

盾の襖に迫られて行き場を失う物盗りたち。

「今ぞ生け捕れ、身ぐるみ剥げ」

ワシは老いたる音頭とり。

かくて今度も事も無し。

第三十一話 雲梯

この国には名物がある。

通称、空の浮き橋。

宙に渡した雲梯のことだ。

渡り切ったら許して貰える。

手を離したら即死だ。

罪人にチャンスを与えるようだけれど、

実は見せものである。

梯子の上には番人が付き添い、

腕が苦しくなると、

こつ尋ねて来る。

「落ちるが良いか？ 斬るが良いか？」

「斬るが良い」

番人が剣を振るう瞬間、

身をひねって己が両脚を切り落とさせた。

「何と！」

身軽になるや渡り切り、

罪人は、その場で息を引き取った。

第三十二話 かまきり

犬の散歩に出かけようとしたら、
路の真ん中で、
かまきりが一匹、
頭を踏み潰されて居た。

そのそばで、
尻からだろう、
条虫が抜け出して、
はげしく右往左往して居た。

（えらいこつちや、どないしよう）

朝夕の散歩の度に見かけたが、
かまきりは横たわったまま、
条虫だけが踊り狂って居た。

（なあ、起きてくれよ）

（たのむよ、なあ、おい）

その夜のうちに、
力尽きて、
条虫も動かなくなった。

朝、

二匹は寄り添うように、
屍を並べて居た。

第三十三話 蟻と蜜蜂

蜜蜂は空が飛べていいなあ、と蟻は思う。

似た者どうしなのに。

あ、雀蜂が来た。

奴らは蜜蜂を襲って暮らして居る。

お、蜜蜂のくす玉攻撃。

大勢で敵を丸め込む。

暑いのが苦手なんだよ」と雀蜂が嘆く。

一寸の虫にも五分の魂。

死に物狂いで戦う蜂と蜂。

傷つくと、巣から落ちて、ぼろぼろと転がる。

な、羽なんか無い方がいいだろ？と死に掛けの蜜蜂がいう。

うん、と蟻がうなづく。

雀蜂さん、また来てね！

逃げ去るお尻に、蟻は角を振った。

第三十四話 残像

独りで観るのが淋しいので、芹沢君とVシネマを観た。

波止場で別れる男と女。

「うわあ凄い、かもめが八十八羽も飛んでるよ」

「賭けるか」

芹沢の台詞に、俺は直ぐに反応した。

はったりだと思ったからだ。

ビデオを止めて、背景のかもめを数えてゆく。

三回数え直したけれど、本当だった。

「おわびに映画おごるよ」

「サンキュー」

俺は芹沢君をちょっとHな映画館へ誘い込んだ。

「うわ、直観像記憶が、残像がー」

彼は、のたうち回った。

第三十五話 思考

その男は物理学に興味を持って居た。

高校生の時、余りにも日々凝り固まって勉強していたせいで、

他人との会話に困る事が度々あったという。

例えば母親に、こんな事を頼まれた時。

「しょうゆ適当にかけといて。ちょっと薄めにね。」

すると彼は忽ち動けなくなる。

(適当? 適当ってどの位や? 薄いつて、どこからどこまでが薄いんやろ?)

そんなことを考えだして、ぼうつとしている彼を見て、

「大丈夫?」

と母親は変な顔をしたという。

第三十六話 歌

自分の可能性を試してみたくて、俺は日本を旅立った。

日本では俺は其の他大勢に過ぎないからだ。

外国の都会は寂しい。

故郷の歌ばかり想い浮かべてしまう。

ある日、すっかり路地裏に迷い込み、

ヤンキー少年たちに絡まれた。

「時計、寄越せよ!」

「嫌だ!」

と言ったら腕を斬られた。

相手は転がる腕から時計をもぎ取っていった。

(巧いコトやるなア…)

のたうち回りながらも、

俺が思い浮かべてしまうのは、

何故か決まって、

故郷の歌。

第三十七話 口実

小学生の塾。

土曜日の授業が終わって、ある男子生徒が言った。

「先生！明日は僕、休みます。」

「またか！？」

「子供会で野球の試合があるんです。」

「野球と勉強と、どっちが大切なんだ！」

「どうしても抜けられないんです。」

「どうしても？」

「はい。僕キャッチャーだから。」

「レギュラーなのか？」

「はい。今、九人しか居ないので、僕が居ないと試合ができないんです。」

（・・・羨ましい。）

ひそかに、そんな事を思う俺だった。

第三十八話 評判

湖に浮かぶ、小島。

行き来するには、渡し舟。

漁の傍ら、村の男衆が船頭もする。

そのなかで一等、唄ひが上手いと評判な者が居た。

漕ぎながら喉を唸らすのが、船頭の楽しみでもある。

「なに、源さんは不器用だから、

行きしなに乗った客は、

帰りしな、きつと断って、別の舟に乗るのさ。

だから、戻りは空舟になっちまう。

仕様が無いから、

戻るまでの間じゅう、唄ばかり口ずさむ。

唄ひが達者にも為る訳さね。」

ある船頭が話してくれた。

第三十九話 アマチュア

とある将棋クラブ。

自称トロフィーハンターたちが、今日も盤に差し向かう。

横目にみると、

さつきから互いに飛車先の歩を突き合っただけ居る。

受けもせず、と金に成り合う。

(!?)

びっくりする僕に気付いて、隣りの猛者がニヤリと笑う。

「この形はナ、まだ結論が出て無いんや。」

言われてみれば、そうかとも思う。

「ええいつやられた!」

やがて、片方の男が音をあげる。

駒を並べ直すと、

二人は、また、飛車先の歩を突きだした。

第四十話 ビル

俺は今、ビルを一棟、建てて居る。

カラオケボックスにする予定だ。

ひどく値切ったので、業者は怒って居たが。

工事が済み、内装も出来上がったと言うので、

開店の日にちを決めて、機械を運びこむ事にした。

その時になって、業者が言う。

「このビル、使えませんよ？オーナー。」

「どういうことだ？」

「入り口が小さ過ぎて、機械が通らないんです。」

「なんだって!？」

仕方が無いので、

俺は、家族みんなで、そこへ引越す事にした。

第四十一話 ブランク

浩太と俺とは水泳部員。

自由形の種目で絶えずレギュラーの座を争ってきた仲だ。

今度こそは、と思って居たら、

選考会を前にして、浩太が病気になった。

（しめた！）

と、ほくそ笑む俺。

浩太は一週間ぶりに顔をみせて、

ところが、ぶつちぎりで俺を置いて行った。

「まさか休んでる間に背が伸びたとか？」

「ううん。」

浩太が微笑む。

「身体が勝手にね！」

「か、身体が勝手に動いたっていつのか？」

「うん。そうみたい。」

俺は力尽きた。

第四十二話　○か×か

とある女子大が主催するダンスパーティー。

「人数が少ないと盛り上がらないからさ」

ひつこく友人に頼まれて、

渋々、会場へ出掛けていった。

華やかな照明、弾けたDJの声。

やがて、お約束の○×クイズが始まった。

「第一問、すきやきの適温は95度である」

○と×とに別れた、二つのサークル。

俺以外、

なぜかみんな×の方へ寄ってしまう。

「正解は…。です」

忽ち拳がる溜め息の声。

「あ……ええつと……」

結局、盛り下がってしまった。

第四十三話 歩道橋

十九歳の秋。

あいつは専門学校に通い、おれは予備校に通う。

夜風に当たり、歩道橋の上で語り合うのが日課だった。

「明日、実家に帰る事にしたよ。」

「どうして、急に？」

「ギターの練習は何処でも出来るから。」

あいつの横顔が脱色した髪に隠れる。

この場所で、

将来の夢を打ち明け合ったのは、

ついこの間のことだったのに。

忘れた頃、おれ宛てに葉書きが一枚、

「どちらかが有名になったらまた会おう！」

そう一行だけ書いてあった。

第四十四話 円

数学者はいう。

円周率 π を求める方程式、その解は割り切れない。

物理学者はいう。

人間の知覚には限界がある。

理想の円周、完璧な円。

いや、工夫さえ凝らせば、必ずや作り得るはずだ。

彫刻家は削り代も兼ねて、巨大な鏡を設けた。

そして幾何学的に計測しつつ、少しずつ削り始めた。

現代の技術、その粋を尽くした、真の円。

出来たと思いきや、また削り、

出来たと思いきや、また削り、

結局、鏡は失くなって、後には何も残らなかった。

第四十五話 遺伝

ぼくのお兄ちゃんは大学生。

だったけど、今は浪人して居ます。

「弁護士を目指す俺様に皿を洗えとは何事だ！」

と言つのが口癖です。

そう言つて、いつもゲームばかりして居ます。

ゲームと司法試験と何の関係があるのでしょうか。

お兄ちゃんが勉強を教えてくれたので、

弟のぼくが先に弁護士になつてしまいました。

「遺伝だな。」

(・・・)

兄弟して笑みを交わします。

兄のお祝いの言葉に、

ぼくは全力で首を振って居ました。

心のなかで。

第四十六話 隠し扉

わたしは本を読むのが好きだ。

父の影響かなとも思う。

新聞を読む姿しか見たことは無いけれど。

ある日、父の書斎へ行つた時、

父が立ち上がって、仏壇を動かし始めた。

そこには隠し扉があつて、

開けると、

なかは見渡す限り、見も知らぬ本で埋まつて居た。

「これ、ぜんぶ本？」

「うん。」

「父さんの本は無いの？」

「うん。」

わたしは少しがっかりする。

「父さんの本は、ここにあるよ。」

そういつて、父は、わたしの頭をなでてくれた。

第四十七話 夢の途中

アニメに恋した彼は、まず俳優になろうと思った。

俳優が、ついでに声優もやる。

彼が劇団に入って数ヶ月、

「ドラマに出たから観に来い！」

と知らせて来た。

友人たちがテレビの前に座ると、それは時代劇。

悪代官を前にして、越後屋が畏まって居る。

越後屋の背後に控えるのは、手代。

その背後には、雲助。

太い横木が、その横顔を隠して居る。

「これ、これ！」

「どれ？」

「この駕籠掻きが、おれっ！」

言われても、分かるわけ無かった。

第四十八話 言い訳

近所の薬局で、

「100%痩せます」

と書いた痩せ薬を見かけて、思わず買った。

痩身は女性共通の悩み。

わたしは100%という言葉に弱いのだ。

早速試してみたけれど、ちっとも痩せ無い。

悔しくて、文句を言いに行った。

「ちっとも痩せ無いじゃない？お金返してよ！」

すると店員がこう言った。

「これは100%に限り無く近いという意味です」

「へ？」

「世の中に100%なんてあり得ません」

わたしは巧い言い訳にも弱いのだった。

第四十九話 聖夜

イヴの夜。

世界中の人が楽しんで居るかと思うと、居ても立つても居られない気分になる。

本命じゃないけど、空いてそうな男友達にメールしてみた。返事は、すぐに来た。

今からメールしようと思ってたと言う。やっぱり、と私は思う。

イヴの夜に一番先に思い浮かぶ名前。

それが、つまり本命なのさ。

私はドキリとする。

もつと別の呼び方無いの？

私、ギャンブル嫌いなよ。

彼の腕の中、

私は口惜し紛れに、

そう言い返してみたのだった。

第五十話 里帰り

年末、里帰りの季節。

旧友から不意に連絡入る。

会うのは何年ぶりだろう。

「お前、変わったな」

「そうかな？君は変わってないね。」

車内、二人きりなのに、

アイツは地元の言葉を遣おうとしない。

「社内は標準語以外禁止でね！」

「ここは社内か？」

「普段から標準語で話すよう会社から言われてるのさ」

年明け、そんなアイツから小包が届く。

何だろうと思って開けてみると、

果たして、中身は、

俺が失くしたと思って居た、携帯だった。

第五十一話 初夢

「初夢みた？」

「うん。みたよ！」

「…どんな夢？」

「宝くじを買ったんだ。」

連番で十枚。

当選番号と照らし合わせると、

組番が一緒、しかも下二けたまで同じなんだ。

オレは十枚買ってるんだから、

来たーっと思ったね！

いちばん上の一枚、その下一けたが0、当選番号は7…

急いで続き番号を確かめると、9…

なぜか下へ下ってた。

「イイ夢みたよ。」

（どうして私の夢を見ないのよ？）

そんな彼の隣りで私は今年も拗ねて居たのでした。

第五十一話 初夢（後書き）

今年もよろしくお願いしますw！

第五十二話 夜明け前

それは、夜明け前に起きた。

「緊急事態です、隊長」

「何事だ」

「震災により建て物が倒壊、全域で多数の死傷者が出て居る模様です」

「た、直ちに出勤だ」

「しかし隊長、未だ司令部からの許可はありません」

「人命救助とは一刻を争うもの、そんなもの待って居られるか」

「しかし我が軍の独断では、ー」

「責任は俺が取るっ行くぞ」

「どうなっても知りませんよ」

副隊長以下、全員、覚悟を定める。

その頃、

当の司令官は、寝坊して居た。

第五十三話 石段

学校への行き帰り、近道して上る長い石段。

子供たちがグリコをして遊んで居る。

そこへひょっこり、同級生の由香が現れた。

「久しぶりにグリコしようか」

「もう中学生だぞ、オレたち」

内緒で賭け合いっこしてた、あの頃。

もともと、負けるのは、いつもオレ。

オレはチョコキが好きで、

由香にはそれがお見通しだから。

なのに、今日の由香はパーしか出さない。

「しばらく待っててね」

「ん？」

そう言えば、

二月十四日は、もうすぐだった。

第五十四話 父子

「ええか、男の児はウソ吐いたらアカン」

「うん」

「それからな、男の児は泣いたらアカン」

「うん」

「俺が言いたいんは、それだけや」

「ほな、ウソ泣きは？」

「それはホンマに泣いとる訳やないから、ええんちゃうか」

「カワウソは？」

「それはウソちゃうからー」

「せやけどウソやん」

「カワウソはウソ吐かへんねん」

「せやけどウソついとるやん」

「ついとるけど、ついてないねん」

「そんなんウソや」

「ウソやない」

「ホンマや」

第五十四話 父子（後書き）

注）「」は父子、声を合わせて居る積もり。

（・・・どっかで見かけたので、遣わせてもらいました。）

第五十五話 暗黙

二月十四日か。

俺の仲間は、普段通りの澄まし顔。

言い訳なら色々あるが、

まア、勉強ばかりして居るからだ。

クラスメイトは、みんなライバル。

そう思ってるヤツばかりだ。

青春できるのは、

いま、この時しか無いのに、

ホントにこんな毎日でー

いやいや…

なんのなんの…

いつになく会話は弾んだけれど、

馬鹿、バイバイ、ばれたか、等々、

その日だけは、

ばで始まる言葉を一切、遣おうとはしなかった。

男だらけの、バ…

あ、言っちまった。

第五十六話 ギャグ

「チャラリ〜鼻から牛乳…」

これ、弾き語り芸人、嘉門達夫の一発ギャグ。

のち、然る芸人が、これに文句をつけた。

「あれは僕が初めに考えだしたギャグなんです!」

「どんなギャグ？」

司会者がきくと、

彼は、ちよつとしゃがんで、

尻もとに片手をあてがつた。

そして声高らかにいう。

「チャラリ〜尻から牛丼…」

振り向き様、

己が手の内を見て、

驚きの眼を見張る仕草。

「いいんじゃないの？」

司会者の呟きに、

一同、誰もが頷いて居た。

第五十七話 引っ越し

何の変哲も無い田舎家。

いい加減、独り暮らしにも飽きが来たので、

ひとつ引っ越そうと思い立った。

ーと、おもったら、

色んな生き物が顔をみせ、

行かないで、行かないで、と言う。

へび、くも、むかで、ありじごく等々…

ドラ猫に至っては、

「三年後には転生しますから」

と言い出す。

「それで？」

「それで、一緒に住んであげます」

「ウソだろ？」

「ウソです」

この家に何の未練もなかったが、

引っ越しだけは当分、思い留まる事にした。

第五十八話 言い伝え

真円鏡。

それが私の苗字。

まどかがみと読みます。

代々、鏡を作って居るけれど、

実は、真の円を作りだす事に使命が有ります。

真円にて張られた結界には、魔力が有るとか。

そんな言い伝えが在って、

以来、それに取り憑かれて居るのです。

お爺ちゃんは何房具に凝って居たし、

父さんは幾何学に凝って居ました。

その背中を見て育ったので、

（目の下のほくろが偶然、真円になればイイのにー）

なんて思ったりもします。

鏡を眺めて居ると。

第五十九話 奥義

似たような事を考える人は、

古今東西、他にも居たはず。

そう思い着いて、

真円鏡遥、私は古文書の収集に努めて居ます。

ちよつとかビ臭いけどね。

偶然、手に入れた奥義書…

古代の数学者が記したらしい。

石切りの剣とか世界樹の在り処とか、

面白そうだけど全部、無視して、

最後のページへと向かいました。

なに、なに？

これより奥義。

（ゴクリ…）

ただし、奥義は口伝。

私が金切り声をあげたので、

近所の飼い犬が一斉に吠えたてました。

第六十話 はやぶさ

俺は、はやぶさ。

最近、魚の狩りに凝って居る。

鳥肉には、もう飽きた。

(同じ鳥だし。)

海の魚は活きが好い。

手強いが、その分、醍醐味もある。

獲物は勢い段々、大きく為ってゆく。

自分の限界を知りたいのだ。

垂直落下、狙う魚影をこの手に射止めた。

むっ手負いなのに、凄い身動き。

諸共に引きずり込まれる。

なぜ、あきらめない？

俺は、はやぶさだぞ！

自慢の爪が増す増す喰い込む。

よし、限界は分かった…

…けど、溺れてしまった。

第六十一話 見送り

春休み、

高校時代から付き合う彼の下宿へ、

遊びに来た私。

本当は泊り掛けたつもりだったのに、

ささいな事で喧嘩して、

一人だけ帰ることにした。

いつもは必ず見送りに出て来る彼が、

その日は拗ねて窓も開けない。

これじゃ戻りたくても戻れない。

今度会ったらきつと仲直りしよう。

そう心に決めて居たのに、

次の朝、

地震が起きて裏山が崩れ、

彼も生き埋めに為ってしまった。

もう忘れたくても忘れられない。

彼の形見を見る度び、想う。

第六十二話 宝物

子供の頃、よく通った駄菓子屋は、

今は仕舞屋^{しまたや}に為^なつて居る。

店番のおばちゃんは老いてなお健在だ。

投機に凝^こつて、商売を忘れてしまったのだ。

ねえ、何かボロい話しは無いかねえ？

顔を合わすと誰彼なく口にこぼすという。

ぼくは知^しつて居る。

ほったらかしの店の中に、

ガンダムのプラモデルが一式、眠^ねつて居る事を。

宝物は、おばちゃんの足元に有^あるのだ。

でも、おばちゃんは気付いて居ない。

ぼくも、教える積^{しほ}もりは無い。

第六十三話 仔猫

春先は物憂い季節。

広場のベンチにぺたんと腰をおろし、

缶コーヒー片手に、友達の事を思う。

目の隅みに、

ちらつと動くものが映ったのは、そのとき。

みると、桜の樹の股で、仔猫がオロオロして居る。

元気よく上ったまでは良かったが、

降りられ無くて、困って居るらしい。

（降りられ無かったドジな猫…）

たった一人落ちたぼくには、

縁起が好いかも知れない。

ぼくは立ち上がって、

その仔を抱き上げ、

御望み通り、

地上へ放してやった。

第六十四話 音色

人里離れた山道を、

年老いた男が一人、

縦笛を吹いて歩く。

冴えない身なりにも似合わず、

その音色は素晴らしい。

私は跡についてゆき、

彼の庵を尋ね当てた。

縦笛は今も彼の手の内に有る。

それを認めて、

迷う事無く、

弟子入りを申し込む。

今日の音色は、ほんの手すさび。

これも何かの縁。

強つてとあらば、聴かせもしようが、

恐らく、聴く事は叶わぬであらう。

老人の笛が音色を奏でだす。

―と思つ間もなく、

私は、眠りこけてしまった。

第六十五話 偶然

生憎の雨で、キャンプファイヤーは中止。

代わりに4 W 1 Hという遊びをしました。

五列縦隊、役割りを決めて、

いつ、どこで、だれと、だれが、なにかした。

一列目から順に開けてゆきます。

思いつきに任せて書くので、

まともな文には成りません。

ところが、

放課後 校庭で O O 先生と X X 先生が キスをした。

偶然、こんな文が出来てしまいました。

読み上げるO O 先生と書きだすX X 先生とは、

なぜか、どちらも真っ赤になってゆきました。

第六十六話 友達

なっちゃんは高校になって初めて出来た、私の友達。

「邦楽なんて洋楽のコピーばっかじゃん」

いきなり、そんな奇抜なコトを口走る。

エアロ・スミスがお気に入りって聞いたので、

彼女が初めてウチへ来た時、

兄のCDをこっそり借りて、

さりげなく流してみた。

「この曲は？」

「うん、私もたまに聴くんだ」

ウソ、今日初めて聴いた。

すると彼女が言った。

「それじゃなくて、エアロ・スミスかけてよ！」

（！？）

私は急に親しみが湧いた。

第六十七話 元気

「どうしたの？元氣ないね。」

春になると、きまつて声を掛けられる。

「お茶飲みなよ。」

「コーヒー飲みなよ。」

「ビール飲みなよ。」

「ピーナッツ食べると元氣でるぜ！」

思い思い、みんな色んなものを勧めてくれる。

カテキン、カフェイン、アルコール…

どれもホントは気つけ薬になるらしい。

けれども、みんなは知らない。

ぼくが元氣無いのは、

春のせいでも無く、

飲み物のせいでも無く、

やりたいコトが見つからないせいなコトをー。

第六十八話 誤解

AとB、二つのミニ・ブラックホールが出会う場所。

そこに、完璧に均衡した重力場がある。

ゆけ！真円鏡遙、その空間に唯一浮かぶ惑星へと。

ラジャー！

超光速・移動帯に乗って、

非・天然型ロボットを操縦する私。

みえた！

幻の真球・惑星X。

召喚！

出現したのは、石切りの剣。

（惑星って、つまり石じゃん？）

よし！ この剣で天体丸ごと一刀両断にする。

イヤーッ！

（はッ！？）

「どうしたの？ 遙…ヘンな声だして。」

そうじゃないって！

第六十九話 毎度

ふと暖簾をくぐった百円ラーメン。

隣のテーブルには先客が居た。

父親の膝に幼い男の子が二人。

「ああ、おいしい」

「おいしいね」

左右から箸をつけ、

麺をすする、子供たち。

その箸が、汁をかき回し始めた頃、

父親が、どんぶり鉢を持ち上げた。

（ゴク、ゴク、ゴク・・・）

喉仏が波をうつ。

「ねえ、明日もね！」

「明日もね！」

「うん。明日もな。」

「毎度。」

話し声は遠ざかり、

店員は後片付けに取り掛かり、

ぼくも無言で席を立った。

第七十話 二十歳

今日は僕の二十歳の誕生日。

お酒を飲んでも、もう誰からも怒られない。

すっかり大人に成った気分で、

サークルの新歓コンパへ出掛けて行つた。

ビールは苦い。

ウイスキーを飲む先輩を見掛けて、

一緒に水割りなど飲ませて貰う。

「俺が酒が強いつて処ろをみせてやる」

先輩はストレート。

さすがに真似できなかった。

数日後、電話すると、

先輩の声がひどく枯れて居て、

「風邪ですか」

「声帯が溶けちゃった」

「は？」

よく聞こえなかった。

第七十一話 箱の中

神棚に載る、千代紙で折った箱。

「あれはなんじゃ」

と爺やに問うと、

「家宝に御座りまする」

と爺やが答えて、語りだす。

「御覧じろ。」

これは重ね箱になって居って、

箱の中から、また箱が、

その箱の中から、また箱が、

そのまた箱の中から、また箱が――」

開ける手を遮って、問うてみる。

「キリの無いコト、

とどの詰まり、

中には何が入って居るのじゃ？

教えて頼も。」

「さて、爺やも存じませぬ」

顔を見合わせ、

爺やも一緒に首を傾げた。

第七十二話 成程

「長年の修行の甲斐あって、何にでも化けられるようになりました。」

「そうですか。」

「試みにあなたが仰る者に化けてみせましょう。」

「本当ですか。」

「はい。さあ、何なりと。」

「では、小さくなあれ、小さくなあれ・・・」

唱えるに従い、相手は段々、小さくなってゆく。

「小さくなりましたね、成程。」

（どんなもんです！）

蚊の鳴くような声が足元からする。

私は早速、彼をつまんで、

えさ箱に仕舞い、

雑魚釣りにへと出掛けた。

第七十三話 地主

地元の者は皆、知って居る。

あなたはビル王、威張って居るけれど、

その地所が元は誰のものなのか、

地元の者は皆、知って居る。

空襲で焼け野原、皆が地に伏して嘆き悲しんで居る時に、

あなたたちは何をしたか。

（占領し、パレードをし、我々を嘲笑った。）

あの時の悔しさをわたしたちは決して忘れない。

もはや口には出せ無くなってしまったけれど、

役所も燃えて、過去の一切は無に帰してしまったけれど、

地元の者は皆、知って居る。

第七十四話 朝寝坊

「おーい、起きろ！朝練いくぞーっ」

「は、はい」

今朝もまた先輩に起こされた。

合宿に来て、これで三日連続。

「おまえ、朝寝坊なんだな」

「すみません」

ランニングしながら、先輩がいう。

「よし、我が部伝来の目覚ましを貸してやる」

「え？」

「夜の間にセットしといてやるから、安心して寝ろ！」

「お、お願いします」

「ブオーーン」

（ぐあっ）

不快音が耳に入って、

たまらず身もだえする。

それは、電燈の紐の先にぶら下がって居た。

第七十五話 理由

「あのさ」

「話しかけないでっ」

夏祭りの夕べ、

金魚すくいは出来たけど、

射的は一つも倒せなかった。

「あのさ」

「話しかけないでっ」

唇を噛む彼女。

「私、射撃の訓練をするわ!」

(!?)

「一緒に来る?」

「・・・どこへ?」

彼女は、警察学校へ入ってしまった。

しばらく経って、町で彼女とすれ違った。

「やあ！」

「・・・」

「あなさ」

「話しかけないでっ」

（！？）

「肋骨にヒビが入ってるの・・・」

（アイタタ）

そっいうコトだった。

第七十六話 糸瓜（へちま）

校舎の屋根、

その廂に沿って延びる雨樋から、

真つすぐに地上へと立て渡した排水パイプ。

ある日、先生の言い付けで、

その口元へ、ひとつずつ、糸瓜の種子を播いた。

糸瓜は芽を出し、

つるを巻き付け、

競い合うように屋根まで伸びてゆく。

「先生、何で糸瓜なの？」

「うん？」

ある日、先生の言い付けで、

飼育小屋の鶏を外へ離した。

鶏たちは一斉に飛び立って、

めいめい、糸瓜のつるへ留まった。

「コケコッコー」

うれしそうだった。

第七十七話 鹿

ハンター。

耳に快い響き。

猟銃を担ぎ、独り、山へ踏み入る。

山向こうに、鹿の母子が垣間見えて、

遠撃ちに、狙い定めて、撃ち掛ける。

「ダーン」

外した。

母鹿が首を返して、此方を睨む。

走りだした。

逃げる処るか、谷を跳び越え、

此方を指して、立ち向かって来る。

（！？）

気がつくつと、身動き取れなくなって居た。

この期に及んで、金縛りに遭ってしまったらしい。

一声、鹿の鳴き声が響き渡った時、

猟銃だけが、草むらに落ちて居た。

第七十八話 転校生

都会から田舎町にへと転校して来た、私。

方言が違っし、どうしても目立ってしまう。

でも、クラスメートは優しくて、

向こうから話し掛けて呉れる。

すっかり溶け込んだ頃、

私は、気に入った男子に告白した。

でも、ふられた。

(どうして?)

落ち込む私に、隣りの席の子がいう。

「アイツ保育園の時プールで×××もらしたんやで!」

「え!??」

驚く私を見て、その子が身を乗り出す。

「あんな奴よりか俺と付き合わへん?」

お断りします。

第七十九話 背表紙

ゲームの攻略本を買おうと思って、

書店へ入ったら、

背表紙が白い本を見掛けた。

書棚を白く埋め尽くし、売れるそばから運んでは立ててゆく。

白本コーナー。

タイトルを隠して売るなんて、

どついう積もりなのだろう。

お客さんは、それでも次々と買ってゆく。

もしかしたら、福袋を気取って居るのだろうか。

つられて一冊だけ手に取る。

夜、枕元で読んでみる。

つまらない。

ため息がでるほどに。

けど、よく眠れた。

久しぶりのことだった。

第八十話 牛

僕が生まれる前から居る乳牛。

そのお乳が出なくなつて、家の者が語り合う。

「そろそろつぶすか」

「つぶそうか」

その日の夕方、乳牛は逃げて帰らなかった。

「どこへ行つたか」

「だまって居なくなるとは」

僕を連れて、方々を尋ね歩く。

「ンモウー」

「あ、花子」

僕は思わず立ち止まる。

そこは玄さんの牧場。

「あらま、あれ見よ」

「よその牛になりすまして」

花子は慌てて紛れ込む。

「おいてやるか」

「ぜひもない」

しぜんそう決まった。

第八十一話 めまい

私の名は、真円鏡遥。

奥義書の口伝を突き止め、

その写本を携えて、

はるばるエベレストまでやって来ました。

世界樹とは完璧な円柱形をして居て、

スパツと切り倒せば、

真円が具現するとか。

なので、木こりのアンドレと一緒にです。

「なぜエベレストなのだ」

「世界で一番高い山って云ったらココでしょ」

「いや、よく見てみよ」

かつて世界で最も高かった山に世界樹は在る。

「めまいしてきた」

「酸欠だろ」

アンドレは斧を投げだしました。

第八十二話 馬鹿

現地の言葉で世界樹とな名をもつ蟬が居りまして、
幻の蟬なのですが、

それに導かれて、とある山深くに迷い込みました。

世界樹の実とは貴重にて、千年に一度しか生りません。

それが熟れて池の水面に落ちる時、

同心円の波紋が生じて

以下、欠落。

余が立ち会った時は、

わきから蛙が跳び込んだので、ダメでしたが

以下、欠落。

「もう、蛙の馬鹿っ」

「ありがとう！遙っありがとう！」

誰かと思ったら、木こりのアンドレ。

そうじゃないって！

第八十三話 こおろぎ

秋晴れの空の下。

爽やかな気持ちで深呼吸する。

アイツは今頃、どこか空を眺めて居るのだろう。

歩き疲れて、公園のベンチへ腰を下ろす。

(リリリリリ)

その音に、

思わず、ズボンのポケットに手を差し込む。

(ちっ)

こおろぎの鳴き声を携帯と間違えてしまった。

「おじちゃん

ん？」

そこへ、女の子の声。

「公園にゴミ捨てちゃいけないんだよ」

（！？）

靴の下には、もみけした煙草の吸殻が二、三本。

こんな処ろは、みせられないな。

第八十四話 眉

名犯人が名探偵を生む。

そう、どっちかっていうと、

俺は二枚目半、

名犯人の役ばかりやって居る。

取り柄は、眉をしかめた顔。

ただし、三分くらいしか保たない。

なので、いつもスタッフに注意される。

「眉さん、眉、眉っ」

「あ」

芸名は横文字入りなのに、

呼ぶ時は、みんな眉さんという。

「ねえ、あの眉して！」

「勘弁してくれよ・・・」

プライベートの時ですら、このザマだ。

もつとも澄まし顔だと、

誰も俺だと信じては呉れないけれど。

第八十五話 弟子

私の生業は、手紙の代筆。

まだ文も見ず 天の橋立。

そんな御時世だから、縁結びの神様に等しい。

忙し過ぎて弱り切り、一計を案じた。

筆跡は練習させ、弟子に会得させる。

語彙集を造りあげ、それ以外の言の葉は遣わせ無い。

秘密の庵に籠もり、伝授に明け暮れる事、幾春秋。

ついに私の代筆者を多人数、育てあげた。

お陰で私は暇もて余す身分と成ったが、

その代わり文字は、すっかり下手と為り、

今では弟子に代筆を頼む始末に御座候ふ。

第八十六話 物語り

一条天皇の妃、彰子の後宮。

和紙の献上が有り、何か書きつくる事に成つて、

光源氏の物語りを御覧に入れた。

「彰子よ、これは誰が書いたのじゃ」

「によ、女房が」

「その者に是非、会いたい」

まずい。

本当は父の知り合いの神主が書いたのに。

「は、恥づかしがり屋でして」

「そこを何とか」

「も、もう夫も居りますれば」

「何と、それは残念な」

さあ、大変。

きつと明日も御越し下さるに違いない。

この続きを急いで書いて貰わなくては。

第八十七話 時間

休日の朝、昔の知り合いと再会した。

「まだ、この辺に居たのかい」

「ご挨拶ね」

相手は鼻を鳴らす。

「お邪魔していい？」

「ああ、どうぞ」

快くドアを開ける。

うちの中を見回して、彼女がいう。

「あなたの時間は止まったままね」

「そう見えるだけさ」

すると彼女が立ってゆき、

ピアノの上の掛け時計を指さす。

「この時計、狂ったまま止まってるじゃない」

「そ、それはー」

「今まで気付かなかったの？」

「今日、止まったんだ」

嘯いた。

第八十八話 手柄

ある武將が、

風呂に入つて独り、戦さの垢を落として居たら、

「推参つ」

いきなり若侍が躍り込んで来た。

「種子島か」

「御命頂戴っ」

力み返る相手へ、手招きしてみせる。

「もそつと寄れ」

「何をっ」

「いいから寄れ」

応えて、相手がにじり寄る。

「心の臓はここぞ」

胸板をつきだし、ヒタと銃口を宛てがう。

「外すな、しかと手柄せよ」

「うぬっ」

武者奮いしたかと思うと、

若侍は俄かに得物を抛りだし、

「失礼仕った」

その場に平伏した。

第八十九話 カモフラージュ

数年前、PTAの圧力で、

「小説の黙読・禁止」

が条例化された。

即日、携帯小説にも音声読み上げ機能が義務づけられた。

「恥ずかし過ぎて読めない」

効果てき面である。

ペーパーブックは電子化して、もはや骨董品。

お蔭で今ベストセラーなのは東洋の神秘、日本語の本。

翻訳不能なので、

日本語でカモフラージュすれば、

例の機能も完全に沈黙する。

反応ありません！

反応ありません！

なんだ、これ？警告音？

せっかく日本語覚えたのに。

第九十話 背中合わせ

事件の連続が時間を作る。

あなたが未来へ行くのなら、

その分、誰かが過去へ行かねばならない。

さもないと、時間のバランスが崩れてしまう。

時間の番人が、そう告げた。

僕が未来へ行くから、君は過去へ行け。

どっちが得かは分からない。

より良い現在を作るのが、君の使命だ。

僕は素晴らしい未来を用意しよう。

背中合わせ、二台のタイムマシンが発進した。

現在から逃げる者に、

過去も未来も在るものか。

門を鎖すと、番人は欠伸した。

第九十一話 監督

スクリーンから突然、俳優が叫ぶ。

「こら、携帯を閉じろ！」

（なによ？あれ）

（びっくりするじゃない）

客席がざわつく。

「しつかり前を見て！ながら鑑賞はお断りよ！」

（なんでだしぬけにこっち指さすわけ？）

（ばかじゃない）

呆れてバタバタと席を立ちだす。

「たとえ私一人に為っても授業を続ける！」

（見る！偶然の台詞とは思えないだろう）

（あのねー監督）

（ああ臨場感…）

ガランとした館内に約一名、自棄に朗らかなのだった。

第九十二話 最終回

公園を斜めに抜けて居ると、木立の合間から幼馴染たちの語らう姿が垣間見える。

商店街を歩いて居ると、むこうから親友がやって来て、互いに挨拶を交わす。

駅の階段を下りて居ると、先輩の背中を見つけて、

こっちから肩をたたいて、一緒に電車を待つ。

行く先々で知り合いに会うなんて、まるでドラマの最終回みたいだ。

（あれ？どうしてみんなあんなに若いんだろう？）

自分の歳を数えてみて、

そうか、これは夢なんだなと気が付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2376m/>

ひとひねり

2011年10月27日10時13分発行